第 2 回：流儀を超えて

会長　田中 仙堂

「流儀」とは、Jリーグ所属の各地のサッカー・チームに例えられる。

サッカー・チームを応援する場合、Jリーグでは地元のチームを応援していても、ワールド・カップでは日本代表を応援する。Jリーグでは、敵チームのサポーター同志であったものも、ワールド・カップでは共に肩を組んで日本代表に声援を送る。これを「チームを超えて」の活動を言えば、「流儀を超えて」のイメージもつかんでいただけないだろうか。

茶道を稽古する人びとは、普段はいずれかの流儀に属している。その点では、Jリーグ優勝を争う点では、各チームがライバルになるような場面が、茶道でも存在する。しかし、日本の茶道が共通に立ち向かわなければいけない場面では、どの流儀に属する人も、日本の茶道のサポーターとして肩を組むことができる。

チームを超えた活動の認識を得るために、ワールド・カップが必要であったように、流儀を超えた活動の認識を得るためには、世界を意識することが不可欠であった。日本が世界に国を開いた明治に生まれた仙樵居士は、世界の中での日本を意識する。その結果、日本の文化の中で、世界にこれが日本文化だと示せるものは茶道である、と考えたことが、大日本茶道学会設立の呼びかけにつながっている。

世界に向けて、日本の文化としての茶道の全体像を説明するという観点に立てば、一つの流儀が伝えている伝承だけをもってこれが日本の茶道文化のすべてであるかのような説明の仕方では不十分である、という認識も生まれてきたことがうなずける。

茶道人を茶道のサポーターと考えれば、普段は、それぞれの流儀の熱狂的なサポーターであっても、日本の茶道の存亡や発展がかかっている場面では、オール茶道のサポーターとしてふるまう必要があることが、浮かびかがってくるのではないだろうか？

平成 24 年 08 月発行　会報「えんじゅ 72 号」掲載